第１１回定例委員会会議録

教　育　長　）　開会宣言

教　育　長　）　会議成立の宣言

教　育　長　）　会議録署名委員の指名（小石委員）

教　育　長　）　日程に入る前に、ご報告させていただきます。

木村委員と浅井委員は、１０月１日に任期満了を迎えられたところですが、１０月２日より、両委員に引き続き、教育委員の職をお引き受けいただくことになりました。これからも引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

また、木村委員におかれましては、平成２７年４月１日から平成２８年１０月１日まで教育長職務代理者として指定させていただいておりましたが、引き続き、教育長職務代理者として指定させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、審議に入ります。日程第１、報告第４号「平成２８年度全国学力・学習状況調査の結果について」を議題とします。提案説明を求めます。

学校教育課長）　〈議案資料に基づき概略説明〉

教　育　長　）　説明が終わりました。質疑はございませんか。

小　石　委　員　）　大人が見ても物すごく難しい問題も１問ありましたが、芦屋市の平均正答率も低いが全国の平均正答率も低い問題があります。このような問題に対して、どのような考えをお持ちですか。

学校教育課長）　例えば、全国的に毎年課題の上がる割合の問題に関しまし

ては、まだ子どもたちにその内容がしっかりと定着できていないということが十分考えられます。授業の形態や先生の意識も、特に小学校の５・６年生で学習する速さの問題や、そのようなところからさまざまな割合の問題の内容が出てくるので、基礎的な部分での定着の仕方を考えていかないといけないと思いますので、やはり今以上に授業法を考える余地があるのではないかと思います。

小 石 委 員 ）　一番に感じたことは全国の平均正答率が低いとなると、問題が難しすぎるのではないか、学校教育の中で期待されているものをはるかに超えた問題になっているのではないかということを考えてしまいます。これは教育目標がどれぐらい問題の中に反映しているかというようなことの考察もする必要があると思います。これが全部求められている課題ととらえるかによって教育や学校に期待するものが変わってくると思いますが、どうお考えですか。

学校教育部長）　まず数学においては、難問ではないです。なぜなら、感覚ではわかっていることを正確に言葉で説明することができるかが問われている問題だからです。例えば３６０度の中に１２０度が３つ入るということに関しましては、３６０割る１２０の計算の理由を説明するだけですので、全然難問ではないです。今回も含めて正答率が低い問題に関して、先生方にはこのような問題に対して言葉で正確に説明することができるような授業をしているかどうかの再点検を行ってほしいと思います。

ですので、出題されている問題には全く無理がなく、そして難問が出ているわけでもないし、逆に当たり前のようにやって

きているものについて正確なとらえ方や説明ができるのかが問われていることが一番のポイントだと思います。

小 石 委 員 ）　つまりそのような学力は期待されているが、それに対応した教育は日本ではできていないという評価をするということですね。芦屋市の中でも特にそのようなことを意識した教育を行わなければならないということですね。

学校教育部長）　そうだと思います。この資料に載っている問題は、現在の学習指導要領が求めているものを出題しているわけですので、出題の意図としてはよくわかります。

先ほども例にあげました３６０割る１２０は３という答えの意味がわかれば、そのまま素通りしていくような問題です。子どもたちが前でみんなに説明をする時、比較的に少し曖昧な形で説明を終えてしまう場合もあります。ですので、先生がそこにもう一歩突っ込んでこの説明にはもう少しこのような言葉がいるという授業をこだわってやっているのかという点検が必要ではないかと思います。

浅 井 委 員 ）　では、学校教育部長がおっしゃったような、感覚ですぐわかることを言葉で正確に表現できるかということは、算数や数学でも国語力が大切になる、ということですね。

学校教育部長）　そうです。

小 石 委 員 ）　この問題の正答率の分散のデータはあわせて来るのですか。

学校教育部長）　来ています。

小 石 委 員 ）　そちらのほうとの兼ね合いもすごく重要になると思います。

浅 井 委 員 ）　全国学力・学習状況調査の７ページの、学習や生活に対する意識・実態についての項目について、私が一番良いと感じた

ことは「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」という質問内容が平成２５年度の芦屋市の中学生が７０．９％だったことに対し、平成２８年度は８０．８％に上がっているというところです。やはり意識が変わってきたという点で、これは大変評価できるのではないかと思います。

しかし、平成２５年度の小学校６年生は平成２８年度の中学校３年生と同じ学年の子になります。すると、平成２８年度の中学校３年生の子どもたちの変化は、このデータを見るとよくわかりますが、平成２５年度以前のデータと比較すれば、芦屋市全体の流れもつかみやすいと感じました。

他には、同じ項目の「将来の夢や目標を持っている」という項目内容が小学校の場合は、平成２５年度で７４．１％なのに対し、同じ子どもたちが平成２８年度に中学になり回答すると４４．７％に減少しております。この大幅に減少しているところが気になります。

１１ページの質問事項において、勉強している時間が全国平均と比較しても多いということはとてもいいことだと思います。しかし、手放しで喜べないところは「学習塾で勉強している」という質問項目において、芦屋市の小学生の平均が６８．８％に対して、全国の平均が４５．９％になります。この全国平均との差によって１日当たりの勉強時間などに反映されていると思ってしまいました。ゲームやスマートフォンをさわる時間は全国よりも少ないです。しかしこれは良し悪しですが、テレビを見る時間も少ないということは、家族が１つの部屋に集まってテレビを見るという家族団欒の時間も少なくなってきている

のではないかと感じました。

松 本 委 員 ）　６ページの平成２５年度の芦屋市の小学生と平成２８年度の芦屋市の中学生は同じ子どもたちですが、この平均の中で私立中学校に行く子は何％ぐらいなのですか。細かい数字までは出せないのかもしれませんが、読書好きの子や理系科目が好きな子が私立中学校に行くなどの傾向があり、記載されている数字が変わっているのなら、同じ子どもたちとは言えないのではないかと思いました。

そして１１、１２ページのところにおいて全国平均に比べて芦屋市が低かった分として、「家の手伝いをよくしている」や「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」、「今住んでいる地域の行事に参加している」などがありますが、このようなことを積極的に取り組んでいる子の方が、成績がいいなどというような相関関係がもしもあるのならば、余り傾向は出てこないのかもしれませんが、それをデータとして取り出してみてもいいのかもしれないと思います。生きる力が大切と言われている中で、芦屋市の子は、勉強はできるがそのような力は少し弱いと感じます。しかし、勉強もできるけれど、そのようなこともできる子は本当にすてきな子だと思います。個別の項目を熱心に見てくださる方は、芦屋市の子はお手伝いがあまりできてないなどと気づいてくださるかもしれません。１０ページの上の「家庭・地域での取り組みについて」という項目においてまとめていますが、あまりお手伝いをするということについてはふれておりません。全国的にも、家のお手伝いは昔に比べると減っていると思いますが、広木克行先生がおっしゃ

っているように、お手伝いなどをすることにより生きる力が育つことにつながり、役割を与えることによって自尊感情が育つということにもつながりがあると思うので、もう少しそのようなところも重視していただけるといいと思います。子どもたちが大人になり、自分って何だろうと思ったとき、勉強しか誇れるものがないと感じてしまうことにならないと思います。現在は、大人になってからの引きこもりも社会的問題になっている中で生きる力を身につけ、芦屋の子どもたちも力強く生きていってほしいと思いました。

学校教育部長）　６ページの平成２５年度の小学校と平成２８年度の中学校の比較では、データの中で重なる子は多いですが、その中で私立中学校には平成２５年度の小学校の調査データからは、約３０％強の子どもたちが抜けておりますので、単純な比較はできないと思います。しかし、例年国語に関して子どもたちの評価が非常に悪いのですが、今年度の評価や成績が上がっていることは特筆すべきことではないかと思います。今回の成績は国語よりも数学の方が良い結果となっていますが、国語は例年よりも力がついていると感じています。２ページの「本市の各教科の調査結果の概要」では、中学３年生の国語Ｂは良好になっておりますが、全国と比較して１１４で「極めて良好」と「良好」のぎりぎりのところでしたので、もう少し成績がよければ、数学と合わせれば４教科中３教科が「極めて良好」になったところです。

去年の中学３年生は、国語Ｂは１０４だったのですが、今年は１１４ですので、国語に関しては力がついており、国語が好

きだ、そして大切だと考える子どもたちが多いと思います。数学のほうは成績はいいですが、数学が好きとか大切とか思う割合が少ない。それでも数学の成績が上がっているということは、国語力がついてきたことも数学の成績に影響しているのではないかと予想しております。

そして、松本委員がおっしゃられた、質問肢項目について家の手伝いをしている子の成績がどのようになっているのかというデータは全て持っております。

８ページにあります「生活習慣や学習環境と教科に関する調査結果」がここにはすべて記載されていませんが、全項目のデータがあります。

松 本 委 員 ）　それでは、あまり特徴的に成績がいいというわけではないのですか。

学校教育部長）　例えば８ページにありますが、読書が好きという子は、明らかに好きな子と好きではない子との平均正答率の差が棒グラフで表されております。それがどの程度の差になって出ているかという質問肢調査の項目全部に対しての、具体的な数字は示されております。

浅 井 委 員 ）　この統計は国が出しているのですか。

学校教育部長）　そうです。

学校教育課長）　市からは出しておりません。

浅 井 委 員 ）　ですので、その表の下に本市の現状を書いているのですね。

学校教育部長）　家の手伝いをすることによって家族の中での役割を果たすことができます。ボランティアの活動においても、地域の活動に積極的に参加するということは大事にしていきたいのですが、

数値的はずっと低いままです。

浅 井 委 員 ）　特に芦屋市の小学生が全国平均との差があると思います。

管 理 部 長 ）　それは保護者の意識の差ではないですか。

浅 井 委 員 ）　それもあるかもしれませんね。

管 理 部 長 ）　ボランティアって保護者が行くから一緒に行くということもあると思います。

木 村 委 員 ）　都市と都市近郊以外の差はあると思いますが、地域のボランティアや祭りに参加する子どもたちは、都市近郊以外の子どもたちの方が多いと思います。私の実家のあたりでは地域の祭りに参加する子は少しやんちゃな子ばかりでしたので、全国学力・学習状況調査において調べた場合、成績が悪くなると思うのですが、そこも地域によって様々だと思います。しかし、当時の子どもたちには、生きる力が物すごくあったと思います。

教　育　長 ）　特に小学校６年生や中学校３年生の進学を意識する子は、家の手伝いをせず勉強だけをするということではなく、家族との触れ合いの中で、自分の役割を果たしていくことが大切だと思います。この数字を見る中で昭和時代とは違い、炊飯器も洗濯機も全自動ですので、家族の中の役割を大事にしていくということを発信していく必要があると思いました。

小 石 委 員 ）　学校での係活動などもそうですね。

木 村 委 員 ）　例年、全国的に自己評価がものすごく低いのが日本の傾向だと思います。芦屋市の場合は、７ページでの、自分にはよいところがあると思うという項目では、芦屋市の小学校・中学校ともに全国平均よりも高くなっています。特に評価できる点は、芦屋市の中学校は平成２５年の平均よりも大幅に増えていると

ころです。

しかし、全体平均を見るとやはり低過ぎると思います。中学生ぐらいの思春期の時は、いろいろな悩みの多い時期ですので、数字が低かったことが悪いと断罪することはできませんが、国際的に見ると、圧倒的に低いです。この数値によって、自分の命を絶つなどのリスクが出てくる可能性も考えないといけないです。今回数字が上がった原因を分析し、さらに数値を上げることができるといいと思います。

小 石 委 員 ）　この数字が低いことは日本人の特徴ですので、一概にこの結果を見て日本人は自己肯定感が低いと判断するべきではないと思います。いろいろなデータにおいても必ずこのような結果が出てきます。ですので、その数字を国際比較する必要はないと思います。しかし、数字が高くなることは悪いことではないので、子どもたちに何か１つ得意なものを持たせる働きかけは、必要だと思います。

木 村 委 員 ）　例えば、お釈迦様はすごく恵まれた家に生まれ、能力もあり、何不自由なく育ちましたが、悩みをたくさん抱え、ずっと悩み続ける一生でしたが、最終的には悟りを開き、世界中信仰されているので、悩むことが悪いとは私も思いません。

小 石 委 員 ）　この数字が、すごく高くても問題です。自分を客観的に見て評価できる力を持たなくてはいけません。それを評価する力がなければ、すごく高い数字になってしまいます。ですので、それは困ります。中学生になると自分を客観的に見ることができるようになるので、低くなるのは当たり前の話です。しかし、そのときに自分のいいものをしっかりと持てているのかが大事

になっていますので、そのような働きかけは必要だと思います。

木 村 委 員 ）　自己評価の低さが絶望につながるようなことは避けなくてはいけないです。

小 石 委 員 ）　そうですね。そこで何か１つ頼りになるものを持つことは、すごくいいと思います。日本人は余り表に出しませんが、自分はこういうことができるというものを持てるといいですね。

管 理 部 長 ）　自分のいいところをしっかりと持つということは、中学生になれば、自分を客観視できるようになるということですか。「将来の夢や目標を持っている」という項目の数字が低いということに関係しているのですか。この数字は問題が大きいと思います。

小 石 委 員 ）　これはわからないです。

しかし本当かどうかわからないですが、もう先が見えてしまう社会とよく言われます。昔は素朴な時代だったので、将来の夢は博士か大臣と言っていたときは、全く自分を客観的に見えていないです。例えば、小学校の子でしたら将来はイチローみたいになると素朴に言いますが、だんだんそのようなものが消えていきます。このようなプロセスの中で新たに、今の自分にとって夢になるようなものを見つけていけるようになるといいと思います。ですので、ノーベル賞受賞者などが出ると子どもたちは励みになると思います。賞を受賞する、しないは別として自分も何かを頑張って研究してみたいと思ったり、スポーツでもオリンピックがあり、その活躍を見ることによって自分も何か頑張れるかなという思いを持つことができる力になると思います。

浅 井 委 員 ）　夢というのは、自分が将来どのような自分になりたいかを具体的にイメージできることだと言います。今は子どもたちが，そのようなイメージを持てる機会が少なくなっているのかもしれません。ですから、大人がそのようなことをイメージできる世の中にしていかないといと思います。

木 村 委 員 ）　現代社会の身近なところで夢になるような人が少なくなってきていると思います。ノーベル賞や野球選手は別として、一般の人の中からこの人みたいになりたいと思う人が減ったと思います。それでしたら、グローバルな社会ですので世界で活躍している人などを夢に持ち、日本という殻を破って世界レベルで社会を見ることで、世界で活躍している人を手本にして、夢を見ることができるように誘導していくことが必要な時代になってきたのかもしれないです。

小 石 委 員 ）　例えば何のために勉強しているかということを考えたときに、どこまでの将来をイメージして勉強をしているのかが大切になります。どこかの大学に入りたいということが目標になってしまったら、それはもうその程度になってしまいます。本当は、このようなことをやりたいからこのような勉強をするということをイメージし、その先の将来を考えなくてはいけません。しかし、恐らく現在子どもが置かれている環境は前者になっていることが多いと思います。それではなかなか夢を持つことができないような気がします。

教　育　長 ）　ふるさとの歌の中に「志を果たしていつの日にか帰らん」という歌詞があります。これは立身出世して偉くなって田舎に帰るという意味です。しかし、今は安定から横ばいに入る時期

で、子どもも少なくなってきています。小さいときにはピアノをひくと、この子は天才ピアニストになるのではないかなどと、親は大きな夢を持っていました。成長するにつれだんだんと現実味を帯び、よりリアリティーになり、最後には、せめて高校や大学にはここに行ってほしいという目的だけになってしまうところがあります。

外国に行って活躍する人、田舎に残って地域で活躍する人のどちらも大事です。仕事には上下はなくどの仕事も尊いということです。その仕事に対してのプライドが未来に対する夢につながると思います。このようなことを踏まえると中学校の段階では、勉強することは将来の夢につながる基本として大事なことであることや、大人が子どもに頑張った人の様子を聞かせるということを、発達段階に応じて行っていくことが大切だと思います。小学校の低学年ではイチローになりたいと思っていることは、それでいいのです。しかし、中学３年生になると今度は義務教育が終わり、高校受験という新たな関門に立つときのワンステップとして教育委員会としても十分に認識し、対応していかないといけないということを痛感しました。

小 石 委 員 ）　大人が仕事に対するイメージのもち方が狭過ぎると思います。

本当は様々な種類の仕事があり、多方面で活躍していますが、そのようなものがなかなか見えないという状況の中に置かれていると感じています。

浅 井 委 員 ）　ふるさとの「志を果たしていつの日にか帰らん」という歌詞ですが、文部科学省の研修で「果たして」ではなくて「果た

しに」と考えたいとおっしゃっている職員の方がおられました。それも地方創生にもつながると思いますし、１つの歩みの形だと思います。

教　育　長　）　ぜひそのようなものを、芦屋の１つの方向性として、十分に持っていかないといけないと思います。芦屋独自の試験もしていませんので、この数字は客観的な資料として大事にするべきものです。校長会で言ったのですが、１点、２点が上がることを目くじら立ててするのではなく、義務教育の公立学校においては自分の発表ができ、いじめがなく、落ちついた環境の中で学習し、人の話を聞くことができるような、安心して学習できる学校運営をすることが一番大事なことだと思いますので、職員もそれを一番基本において対応してほしいと思います。

小 石 委 員 ）　去年も思いましたが、１１ページの１４番の質問事項について、休日に３時間以上勉強することはとてもすごいと思いました。

受験を控えているからなのか、特に小学校が多いです。そこのあたりが芦屋の１つの文化を反映している気がします。

学校ごとにどのような特徴の違いがあるのかという学校ごとによっての芦屋だけの分散を出し、分析していただいているのでしょうか。

学校教育課長）　学校ごとにつきましては公表しないということになっております。

小 石 委 員 ）　公表はしなくても分散は手元にもっているのであれば、そのようなことも含めて学校ごとに特徴をしっかりつかんで、それぞれの学校にあった対策をすることが大事なことだと思いま

す。このテストの一番の目的はそこですので、ぜひそこは力を入れてほしいと思います。

そして、子どもたちに学習の仕方を、力を入れて指導してほしいと思います。成績がよい子は、学習の仕方がわかっています。塾に行っている子も、そこでそれなりの学習の仕方に沿って指導されているからできると思います。しかし、そのような機会がない場合、どのように学習するのかがわからない子がたくさんいると思うので、学習の仕方がわかれば、伸びる子はかなりいるのではないかと思います。少し背中を押してやるとできる子もいると思うので、意識的に指導してほしいと思います。

松 本 委 員 ）　物事の視点を変えるというリフレーミングがはやっています。見方によっては長所も短所になり、短所も長所になるということです。親は自分の子どもに対して、できていることよりもできていないことのほうが気になり、そのようなところを指摘しがちです。進路の学習はリフレーミングのような考え方で行うのですか。学校現場だけではなく、人権学習や多様性を認める教育などを行うのですか。ＰＴＡの中でも、褒めて育てるということが大分主流になってきています。子どものいいところを探すときに、見方を変えたらいいところがたくさんあるという話をたくさん聞きます。子ども自身が短所だと思い込んでいても、見方を変えればそれも長所になるのかというような気づきがあると、自分では余りいいところがないと思っていたけど、他人から見るといいところかもしれないと思うことができるかもしれないと思います。

多様性を認めようと言いながらも、実際はたくさん勉強をさ

せるなどと、価値観は単一になっていっているような気がします。リフレーミングは、そのような傾向に少しずつひっかかりをつくるということに有効ではないかと思っています。例えば、先生方も宿題などをしっかりと提出したほうがいいと思うかもしれませんが、そうでない子にリフレーミングの考え方を使うと、細かいことにこだわらないおおらかな性格と言うこともできると思います。先生方も再確認という意味で、リフレーミングみたいなものを人権学習や進路の学習の中に入れていってもよいと思います。得意なことをつくるということにしても、みんなよりすぐれていることをつくることができる子は少なく、どれもみんなには負けていると思う子もたくさん出てくると思います。それでもいいと思えたらそれでいいのですが、一般的に言うすぐれた面をつくるのではなくても、おおざっぱな性格であってもおおらかでいい性格だと思えたりするなど、地道な自己肯定感を育てることが大事ではないかなと思います。各家庭の考え方の影響のほうが大きいかもしれないですが、学校ではそのような違った見方で学習するということは、子どもたちは素直なので、吸収してくれるのではないかと思います。

学校教育課長）　進路の学習という冊子の中で、中学生につきましては進路、現在、自己実現、夢の実現ということがあります。その中で、自分自身を振りかえるという内容を、できるだけ取り入れるようにしているのですが、周りを巻き込み自分を見つめるということにつきましてはまだまだできていませんので、毎年内容の改訂を行い、よいものを作っていこうと考えておりますので、参考にさせていただきたいと思います。

学校教育部長）　具体例に当てはまるかどうかわからないですが、いろんな多様性を評価するということで言いますと、同じクラスに日本語で十分話ができない外国人の子が入ってきた場合、勉強に関して言いますと、学校の授業がりわかりにくいので、勉強のモチベーションが高くなりにくいというところもあるりますが、その子が持っている国際的なものが、クラスの中で発揮されることにより、その子が生かされる場面がつくられることもあります。ですので、各学校はほかの子が持っていない何かを引き出してあげるという感覚は持っているのではないかとは思います。

木村委員）　現在アクティブラーニングと言われていますが、先生方は生徒をチーム分けするときに、すごく子どもの個性を見てチーム分けをしていると感じました。頭のいい子はいますが、突っ走ったことを言ってしまう子もいて、それをある程度フォローするような子がいるなどと、子どもたちをしっかり見て組み合わせをしています。そのような研究を今以上に深めていくということが必要だと感じました。能力的には余り優れていませんが、まとめ役みたいなことが上手な子もいると思います。その子は余りそのような発想はできなくてもうまくまとめてくれるので、このチームは君が必要だというところで、そのような役割分担をすることが、アクティブラーニングの教育の中には含まれていると思います。先生方は生徒の個性をすごく見ていらっしゃいますね。

浅井委員）　みんな違ってみんないいということですね。

小石委員）　参考にしていただけたらと思うもですが、１つの試みとし

て小学校５・６年生の子を対象にクラス全員に名簿を渡し、その子のいいところを書いてもらい、その書いてあることを本人にみんながこういういいところをあげていると渡したことがあります。そうすると人間関係がすごくよくなり自信がつき、親から感謝されました。調査をして親から感謝されることは珍しいことです。このことがきっかけで、いいところと気がつくこともありますが、その長所はほとんど自分でわかっていることが多いと思います。本当はみんな自分の長所と思っていても、なかなか表現できないので、それを言われることで再認識することができ、うれしくなると思います。そのような工夫をすることで、お互いに認め合えることができるのではないかなと、そのとき感じました。

浅井委員）　１０ページの質問事項１の「朝食を毎日食べている」という項目が、芦屋市は全国よりも若干低くなっています。やはり朝御飯を食べている子どもの正答率の方が高いということは、はっきりと証明されています。家庭でのごはんが難しいから給食をという意味もあるのかもしれませんが、せっかく芦屋の給食がよく、芦屋の培ってきた食育を１００％に近いぐらいに、もっと効果的に発揮してほしいと思います。親が無理でも子ども自身が食べなくてはいけないという意識を持ち、自分でも簡単なものなら用意して食べるぐらいのところまで行けたらいいと思っています。西宮市や神戸市からいらっしゃった方々は、芦屋の給食にびっくりするという声を聞きます。そして、日本一の給食ではないかと言う人もいらっしゃり、本当に誇れるものだと思うので自信を持ち、その辺をもう少し推し進めらてい

けたらいいと思っています。

教　育　長　）　はい、ありがとうございました。

他に質疑はございませんか。

無いようですので、これをもって質疑を打ち切ります。

これより採決いたします。本案は、原案どおり承認することに御異議ございませんか。

〈異議なしの声〉

御異議なしと認めます。よって本案は承認されました。

〈報告第４号採決。結果、承認（出席委員全員賛成)〉

全国学力状況調査の結果を、とるだけで終わるのではなく、委員から御提言のあった内容も踏まえて、できることは早急に対応し、来年度に対応することと、メリハリをつけた対応をしてほしいと思います。

教　育　長　）　閉会宣言